2015 / 2016　ニュースレター [冬]

# OBON SOCIETY

## ～ 家族の絆… 心の癒し ～

ヴァーン・トンプソン（92歳） 元米海軍兵

私達は、OBON の活動について最新の報告をさせて頂けるのを誇りに思います。
新しい活動名や、兄弟愛、和解について感動秘話のご紹介。お祖父様を知らない
和美さんからの手紙（１０＆１１ページ目）は、どうぞお見逃しなく。
加えて、OBON ソサエティーが、外務大臣表彰を受賞した発表もございます。

目次

**2ページ：**
OBON からの発表
**3 & 4ページ：**
和解についての話
**5, 6 & 7ページ：**
渡辺氏の手がかりを求めて
**8 & 9ページ：**
グレン・ストックデールさんの旗
**10 & 11ページ：**
孫からの手紙
**12ページ：**
外務大臣表彰 の授与
**13ページ：**
OBONソサエティーへのお問い合わせ

# OBON SOCIETY

**～ 家族の絆… 心の癒し ～**

**当団体の活動に変更はございません。**

**私達は、今までと同じ活動趣旨で活動に取り組んで参ります。**

**２０１６年度から、新しい活動名へ変更し、末長く尽力して参ります。**

ソ サ エ ティ ー

## OBON SOCIETY

日本語のホームページは、こちらのリンク先です：**www.OBON2015.com**

英語のホームページは、こちらのリンク先です：**www.OBONSOCIETY.org**

（英語のホームページは、現在、作成中です）

マリオン・スカラシーさん

捕獲した旗を持つマリオン・スカラシーさんと友人

アメリカ海兵隊でライフル銃兵であったマリオン・スカラシーさんは、先の大戦で多くの戦場に赴きました。その中には激戦地であったタラワ環礁も含まれています。

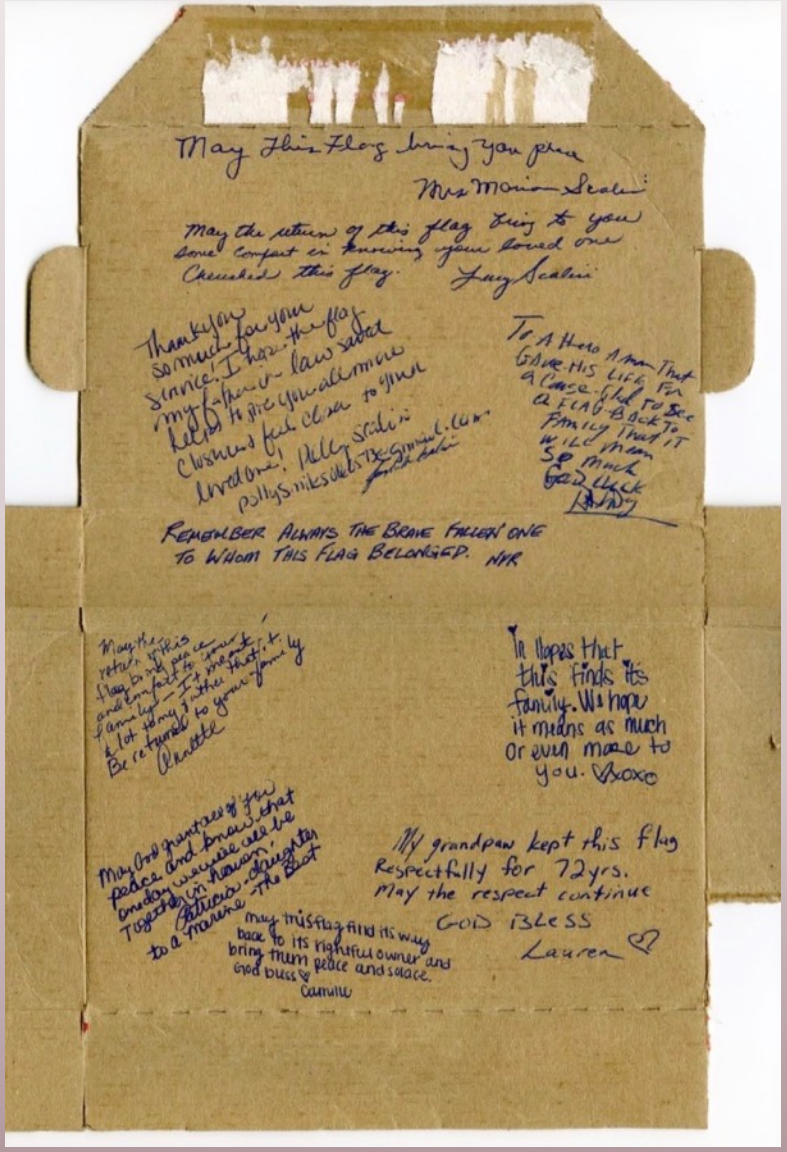
１９４３年１１月２４日、島が制圧された翌日、スカラシーさんを含めた海兵隊は、侵略に最期まで抵抗する意を決した日本兵との戦いを継続しておりました。戦死した日本兵のヘルメットの中に、畳み込まれた署名入りの強運の願いが込められた見たこともない旗を、スカラシーさんが偶然にも発見したのはこの時だったのです。

スカラシーさんはこの旗を戦地からの戦利品として家に持ち帰り、７２年もの間誇らしげに飾っていたのです。彼を知る人々は皆その旗の事を知っていましたが、スカラシーさんは戦地での苦境について語ることは滅多にありませんでした。しかし昨年１１月にスカラシーさんが他界する前、彼は家族に出来ることならこの旗を亡くなった兵士の子孫に返還して欲しいとの言葉を残しました。

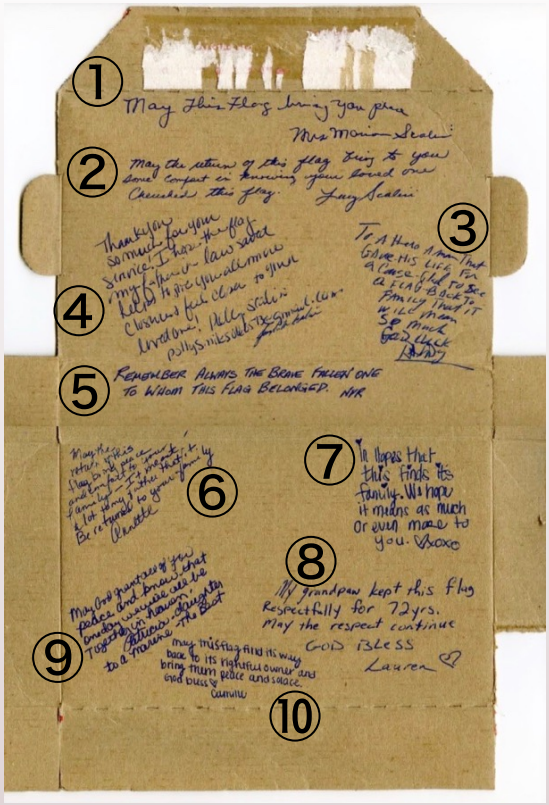
スカラシーさんの家族はOBON ソサエティーに連絡を取り、旗を送ってきました。そして調査が始まりました。

丁寧に梱包された箱を開けますと、箱の狭い内側に幾つかの手書きのメッセージが見えます。箱を広げてみますと、家族の人たちの心を打つような私的なメッセージが旗と共にありました。

心に沁みるこの和解の出来事は、私たちの心を揺さぶりました。




この旗は現在調査中です。*OBON* ソサエティー の研究員が、手掛かりを通じてご家族の判明に努めております。




**下記は、箱の内側に書かれたメッセージです。**

①May this flag bring you peace.　Mrs. Marian Scalasi

②May the return of this flag bring to you some comfort in knowing your loved one cherished this flag.  Lucy Scalasi

③To a hero a man that gave his life for a cause – glad to see a flag back to family that it will mean so much good luck.  Randy

④Thank you so much for your service.  I have the flag my father-in-law saved helps to give you all more closure and feel closer to your loved ones. Josef Scalasi

⑤Remember always the brave fallen one to whom this flag belonged.  NYR

⑥May the return of this flag bring peace and comfort to your family.  It meant a lot to my father that it be returned to your family.  Annette

⑦In hopes that this finds its family.  We hope it means as much or even more to you.

⑧My grandpaw kept this flag for respectfully for 72 years may the respect continue. God Bless.  Lauren

⑨May god grant all of you peace and know that someday we will all be together again in heaven – Patricia daughter of marine – the best

⑩May this flag find its way back to its rightful owner and bring them peace and solace – god bless  Camillo

**① 旗が貴方に平和をもたらしますよう。ミセス・マリアン・スカラシー**

**② 貴方の愛していた方が大事にしていた旗が帰ってくることにより、ひと時の安らぎを与えますよう。ルーシー・スカラシー**

**③ 目的のために命を捧げた英雄へ。家族の元へ旗が戻ることを嬉しく思います。ランディー**

**④ ご奉仕に感謝します。私の義理の父が持っていた旗です。これがご一家への終止符になり、愛された方へ少しでもお近づきになれますよう。ジョセフ・スカラシー**

**⑤ 勇敢にこの世を去ったこの旗の持ち主をいつも思い出せますように。NYR**

**⑥ この旗のご帰国が、ご家族に安らぎと平和をもたらしますように。私の父にも大変意義のあるものが今こうしてご家族の元へ。アネット**

**⑦ ご家族が見つかりますように。大事なものであると思います。そして貴方にとってはもっと大事なものでしょう。**

**⑧ 私の祖父が大事に７２年間保管しておりました。これからも大事にされますように。神のお加護と共に。ローレン**

**⑨ 神様が貴方に平和を。そしていつか私たちは天国で一緒になれますよう。最強の海兵隊の娘―パトリシア**

**⑩ この旗が本当の持ち主の下へ戻りますように。そして平和と安堵をもたらしますように。神のお加護を添えて。カミロ**

## ~ 渡辺氏の手がかりを求めて (1) ~

我々OBONソサエティーは 、日米両国の皆様から、多くの情報を頂きますが、渡辺鶴雄氏に関する手がかりはあまりありませんでした。

開戦当時、渡辺氏は、まだ、学校に通う幼い少年でしたが、二人の兄が出征する時のことを鮮明に覚えています。一番上の兄は、出征直前、学校の制服を買ってくれました。その時の誇らしげな顔は、今でも脳裏に焼きついています。

長男は満州で戦死しました。戦友を通じて遺灰が届けられると、母は悲しみにくれましたが、兄の魂を、家族の墓に供養することは出来ました。二番目の兄(写真左)の消息は、依然不明のままでした。

戦争が終わり、帰還兵を乗せた船が到着すると、母は必ず港へ行き、次男の姿を捜し求めました。来る日も来る日も、母は港で次男の姿を待ち続けました。

終戦から３年後のある日、政府から小さな箱と共に、一通の手紙が届きました。手紙には、彼女の息子が沖縄で戦死したこと、遺品はないこと、箱に入っているサンゴの小片が遺骨の代わりであること、が述べられていました。

渡辺鶴雄氏

家族は悲嘆にくれました。特に、母は、愛する息子を失ったこと、遺骨すらなく、家族のお墓に埋葬してあげることすら出来ないことに、胸が張り裂ける思いでした。渡辺氏は、不憫な兄のために、自分で情報収集を始めることにしました。

今から 50 年前のことです。

渡辺氏は、最初に、公式記録を調べ、兄の部隊がどこへ派遣されたのかを、突き止めます。さらに莫大な量の記録を精査し、戦争の混沌の中、部隊がどのような最後を遂げたのかを調べます。

数年にわたる研究の後、兄が最期を遂げたと思われる場所が判明しました。それは、丘の中腹にあり、長い間放置されていたため、地表は樹木に覆われていました。しかし、大まかな場所は分かったのです。当時存命だった母は、兄が家に帰れることを願っていました。

渡辺氏は、北海道の自宅から、熱帯の沖縄を訪ねます。30年にわたり、毎年、沖縄を訪ね、シャベル片手に捜索を続けました。兄の遺骨を求めて、気の遠くなるような作業でした。

発掘調査中の渡辺氏

## ～ 渡辺氏の手がかりを求めて (2) ～

数千マイルも離れたアメリカ、コネチカット州モンロー市では、バルビエさん一家が、念願のマイホームを手に入れたところでした。バルビエさん一家は、入居する前に、前の家主のドゥガさんが残していった品物を片付けることにしました。

クローゼットや屋根裏部屋を片付けていると、バルビエさんは、ある一つの独特な品物に気づきました。

それは、日章旗の寄せ書きでした。

バルビエさんには、当時、それが何であるかは分かりませんでしたが、なにか貴重なもののように思われたので、安全な場所に大事に保存しておくことにしました。 1991 年のことです。

それから24年後、トム ・バンゼ氏が司会を務めるラジオ番組で、当団体の日章旗返還運動が紹介されました。

この放送を聞いていたバルビエさんは、すぐに、自分の家にしまっておいた日章旗のことを思い出しました。

これは、日本の持ち主に返さねば！

彼は、すぐに当団体に連絡を下さり、日章旗を送って下さいました。

当団体のスタッフ達は、豊富な経験と専門知識を元に、寄せ書きに記された名前および表記から、持ち主の出身地を割り出します。北海道、しかも渡辺氏と同じ町でした。まるで奇跡のようですが、この日章旗は、渡辺氏が50年間捜し求めていた兄のものでした。

我々が初めて連絡をした時、渡辺氏は、言葉を失いました。

この情報は、にわかには信じがたいものでした。確認のため、日章旗をスキャンし、その画像データを渡辺氏に送りました。渡辺氏は、それを拡大印刷し、それぞれの紙をテープで固定し、ほぼ実物大の日章旗を再現しました（写真右）。

実は、当時、渡辺氏は、ガン治療の最中でした。渡辺氏は、治療が終わり次第、日章旗をもって沖縄を訪れ、そこで写真をとる事を申し出て下さいました。すぐさま、当団体から、日章旗が渡辺氏へ送られました。十分な時間が残されているのかは、誰にも分かりませんでした。

## ～ 渡辺氏の手がかりを求めて (3) ～

それから間もなくして、当団体に写真が届けられました。写真には、兄の部隊を偲ぶ記念碑の前で、日章旗を掲げている渡辺氏の姿がありました（写真右）

当団体スタッフは、我を忘れるほど、嬉びました。

渡辺氏は、北海道の自宅へ戻り、両親が眠るお墓へ、報告に行きました。ようやく果たせた家族の再会を、お父さんお母さんが良く見えるよう、日章旗を、墓前で大きく広げました。

バルビエさん一家も、この物語に驚嘆しました。四分の一世紀前に見つけたガラクタが、世界中を旅し、生涯かけて、行方不明の兄を捜し求めていた渡辺氏の元に届けられたのです。

バルビエさん一家を代表して、息子のデイブ氏からメールを頂きました。

OBONソサエティーの皆様へ

母は『バルビエ家にとっても、これは誇らしく素晴らしい出来事だ』と申しています。私もそのとおりだと思います。日章旗の寄せ書きがご家族の元へ戻ったこと、渡辺氏の生涯にわたる探索にお役に立てたこと。この喜びは、とうてい言葉では言い表せません。

かつて、米国と日本はたがいに戦争をしていましたが、現在、私たちは、純粋に人として、通じ合うことが出来たのです。これは、望外の喜びです。

文化は異なっても、まるで一つの家族になったようです。日本にいるご家族のお手伝いが出来て、とても感激しています。

渡辺鶴雄氏にお伝えください――　日章旗の寄せ書きがお手元に届けられたと聞き、私は、安心したと共に、とても幸せな気持ちになりました。

デイブ・バルビエ　2015 年 10 月 27 日

## ~ グレン・ストックデールさんの旗 (1) ~

グレン・ストックデールさんには多くの友達がおり、誇り高き退役軍人であった彼はクラスルームを頻繁に訪れ生態学についてのプレゼンテーションを行いました。それゆえに彼は第二次世界大戦中には歩兵第４１師団に所属し国のために奉仕し、退役後は若い学生の将来のためにクラスルームで奉仕をしたのです。

実際に戦地へ行き戦友を失った経験のある兵士の多くは、戦争が終わった後も長年にわたり悪夢にうなされ続けました。悲惨な体験は思考から離れることはなく、それ故にその考えは固執し和解も出来ないほど苦いものになったのです。

多くの兵士達と同様に、グレンさんも戦場からの戦利品として、寄せ書き日の丸を故郷に持ち帰りました。旗の入手経路について彼は語ることはありませんでしたが、旗の話になると、旗は絶対に返してはならないという考えでした。彼はとても頑固でした。臨終の際にも旗は決して日本に返してはならないと言い続けたのです。

## ～ グレン・ストックデールさんの旗 (2) ～

グレン・ストックデールさんの死後、グレンさんの財産は彼の子供達に受け継がれました。その中には第二次大戦からの戦利品も含まれています。そしてこれらはグレンさんの子供たちに引き継がれたのです。

テリー・ストックデールさん

子供達は当然の事ながら、難しい立場に置かれてしまいました。それは臨終の際の父の意志を尊重する大切さと、自分たちが持つ思いやりの心と世界平和への願い、そして和解を実現する大切さでした。

テリー・ストックデールさんにとって、どうすべきかの決断には時間を必要としませんでした。寄せ書き日の丸は日本のその家族の元へ帰るべきであり、アメリカではないと思いました。

テリー・ストックデールさんは、私たちの人道支援活動を知り、旗をOBON SOCIETYに送ったのでした。

詳しい調査の結果、私共のスタッフと研究者達が旗を所有していた日本兵の情報にたどり着き、更にこの方が１９３９年に結婚され、ニューギニアの戦地に送られる前に娘さんと息子さんを もうけていたことが分かりました。

更に調査を進めると、息子さんと娘さんとに連絡を取ることが出来ました。亡きお父上の記憶はないものの、お父上が持っていた寄せ書き日の丸の存在を知り、是非返還されることを希望したのです。

テリー・ストックデールさんは旗の持ち主の詳細が判明したニュースを聞いて驚き、日本へ飛び家族と面会し、父親が持ち帰った旗を自身で手渡すことにしました。貴志さん一家は遺品受け取りのために集まりました。受け渡しのセレモニーはそれこそシンプルなものでしたが、感動に満ち溢れておりました。この旗は貴志一家にとって、故郷に戻って来た父の唯一の形見となりました。

## ～ グレン・ストックデールさんの旗 (3) ～

貴志由楠命のお孫さんが、テリー・ストックデールさん宛に書かれた手紙です。
嬉しさ、悲しみ、和解について、彼女自身の気持ちと思い出秘話を
ご遺族からの了承を得て、皆様へシェアさせていただきます。

貴志由楠 命

テリー様

貴志由楠の孫の松下和美と申します。
この度は、遠い日本まで祖父の旗を届けていただき
ありがとうございました。せっかくお目にかかりながら、直接
お礼を申し上げることができなかったので感謝の気持ちを
お伝えしたく、ペンをとりました。

終戦から長い長い月日を経て、祖父の遺品が見付か
ったと聞いたとき、私は2つの気持ちが胸をよぎりました。

まず1つ目は、あの、お祖父ちゃんって本当に「存在」した
んだという笑われるかも知れない実感でした。私は幼い頃、
祖母からよく戦争の話を聞いて育ちました。それはとても
恐い話でしたが、どこか現実離れしていて昔話の怪談を
聞くようで、よく祖母に「戦争の話をして」とせがんでは
何度も何度も同じ話を飽きずに聞きました。そのせい
あり、祖母の昔話に出てくる祖父は、どこか昔話の主人
のようで、本当に生きていた人という実感のない存在で
なので母から「遺品」という言葉を聞いたとき、初め
「かつては生きていた祖父」に出会えたような
気がしました。

帰りの電車の中、娘に「お祖父ちゃんとテリーさんの
お父さんの接点は結局分からなかったね。テリーさんは
お父さんからは何も聞いてなかったのね」と言ったところ、
娘は「聞かなかったかも知れないし、もしも聞いていたとしても
あえて話さなかったんじゃないかな」と言いました。戦争は
個人的には何も恨みのない人どうしが殺し合うという
恐しいものです。もしかしたら私の祖父が生還し、テリー
さんのお父様がなくなっていたかもしれない。そんな生々
しい現実を今さら話し、お互いに悲しい想いをすることは
ないと娘は言いました。

もしもテリーさんがお父様から何かを聞いておられ、苦しい
思いを抱えてこられたのだとすれば、もうそれはおやめ下さい。
心に傷を負って亡くなられたお父様にも、もう戦争の
ことは気に病まず、安らかに眠って下さいとお伝え下さい。
私たちには、70年もの間、祖父の旗を大切に保管して下さり
また こうして祖父を家に帰らせて下さったテリーさんには
感謝の気持ちのほかありません。

私たち日本と貴国は、悲しい歴史を超え友人となれましたが
まだ友人になれず争っている国々が世界中にはたくさん
あります。悲しく苦しい思いは子孫への祈りに代えて。

次ページへ続く…

## ～ グレン・ストックデールさんの旗 (4) ～

前ページの続き…

そして 2つ目は…。 3

私が幼い頃、祖母から聞いた話では、祖父が所属していた連隊は、ほとんど生還者はいなかったと。おそらくは、ニューギニアに向かう船が撃沈され、ニューギニアには着かないまま亡くなったのではないかと。ニューギニアは食べるものもなく飢え、かつ激しい戦闘があり、どうせ帰ってこないのであれば、もう海で死んでいた方がいい、その方がいいと祖母は話していました。どこか物語めいて実感のない祖父、海に沈んだという祖母の話から、私はこのお話を聞くまで地に倒れている祖父の姿を一度も想像さえしたことがありませんでした。が、このお話を聞いてからは、地に倒れている祖父の姿が何度も頭に浮かんでは、苦しかったんだろうか、最期には何を思って死んでいったんだろうかと、とても切なく涙が出ました。

そしてテリーさんにお目にかかり、返還していただいた旗を目にしたとき、私は驚きました。そのあまりの美しさに、とても70年という長い月日を経たものとは思えませんでした。テリーさんの亡くなられたお父様、そしてテリーさん、テリーさんのご家族がどんなに大切に祖父の旗を保管して下さっていたのだろうと胸が熱くなりました。百万の言葉より、あの旗がテリーさんご一家の気持ちを物語ってくれた気がしました。

4

いつかまた必ずお目にかかりましょう。
その日まで、どうかお体を大切にお元気で!!
本当に本当にありがとうございました。

2015. 11. 30
松下 和美

**OBON SOCIETY** のスタッフ一同は、日米間で「平和」と「和解」「友好」の架け橋として尽力しています。元米兵達から返還依頼を受けた遺留品を、捜索・調査をし、ご遺族のお手元へ返還いたします。

**OBON SOCIETY** の取り組みが日本政府に認められ、表彰が授与される事になりました。２０１６年１月２１日に大村昌弘シアトル総領事より、レックス＆敬子ジークが、当団体のスタッフやサポーターの皆様を代表して受け取って参りました。

## OBON SOCIETY への日米戦後７０年に際する外務大臣表彰の授与について

１月２１日、在シアトル日本国総領事公邸にて行われた新年会において、OBON SOCIETYの日米関係の発展への寄与に対して、外務大臣表彰が大村昌弘総領事より授与されました。

OBON SOCIETY（旧名 OBON 2015）は、レックス＆敬子ジーク夫妻を中心に設立された非営利団体であり、２００９年から、第二次世界大戦で連合軍兵士が持ち帰った「寄せ書き日の丸（日章旗）」をはじめとする日本兵の遺留品を親戚や関係者へ返還する活動を行っています。昨年、その活動が日本政府に認められ、ジーク夫妻は米国人退役軍人数名を日本に同伴し、安倍総理大臣と会談しました。戦後７０周年にあたる昨年、同団体の活動は日米両国の和解を象徴する意義のあるものと評価され、今回の受賞が決定しました。

日米戦後７０年に際する外務大臣表彰は、日米戦後７０年を記念して、日米間の友好交流の増進に顕著な功績のあった関係者に対し、その功績を称えるため、全米で２８名の個人と１４団体が表彰されました。

在シアトル日本国総領事館のニュースリリースより

# OBON SOCIETY へのお問い合わせ

**～ 家族の絆… 心の癒し ～**

**「寄せ書き日の丸」を所有されている方をご存知でしたらOBONソサエティー へご連絡下さい。**
**私たちは、ご遺族へ返還できるよう、お手伝いをさせて頂きます。**

＜連絡先住所とメールアドレス＞


**OBON SOCIETY**
P.O. Box 282
Astoria, Oregon 97103
contact@obonsociety.org


## OBONソサエティー へのご支援のお願い

**OBONソサエティー は、日章旗の提供者からご遺族の捜索、返還に至るまで無償で行っております。**
**皆様からの寄付金は、OBONソサエティー の活動資金の財源として有効に活用させて頂きます。**
**皆様のご支援とご協力に、心より感謝を申し上げます。**

＜ゆうちょ銀行＞
記号：１４４５０　番号：１６５７７７８１
名前：オボンニセンジュウゴ

＜他金融機関＞
店名：四四八（ヨンヨンハチ）　店番：４４８
口座番号：１６５７７７８
口座名：オボンニセンジュウゴ

OBONソサエティーは、米国の非営利組織です。